
夏休み旅行

葵羽

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

夏休み旅行

【Nコード】

N8154A

【作者名】

葵羽

【あらすじ】

夏休みにはやっぱり旅行 とういうわけで皆で旅行に行くお話です

(^ v ^)

第1話 チケット

* この物語は1枚のチケットから始まった *

それは1週間前の阿笠邸で

「ほれ、哀くん」

博士は小さな紙切れを哀に渡した。

「何これ？」

「わしが懸賞で当てた北海道旅行のチケットじゃ」

「え!?! 北海道!?!」

「そうじゃ。北海道なんか滅多に行くことが出来ないじゃろ」

「そ、そうだけど……でもこれは博士が当てたんでしょ? だ
つたら博士が……」

「わしはこの日、友人と博物館へ出掛けるんじゃよ」

「それにしても……」

「わしの代わりに哀くんが行ってくれたら心残りもないしのお」

「博士……」

「ほれ、新一や子供たちを誘って行って来るんじゃ」

「……ありがとう」

* この物語の始まりである *

第1話 チケット（後書き）

この間PCが壊れてて急いで買いました（汗）
そのピカピカのPCで連載小説スタートですよ！！

第2話 お誘い

そして次の日

夏休みなのに特にすることはなく阿笠邸でファッション雑誌を
読んでいた哀はチケットのことを思い出した。

テーブルの上に置いてあった携帯電話を手にとってアドレス帳を
開くとそこにはたくさんのメールアドレスと携帯番号が載っている。

「まずは工藤くんから・・・」

哀はコナンに電話をかけた。

トゥルルルルル・・・

なかなか電話に出ないコナンに少しいらついていた途中

「もしもし？ 灰原？ 俺だけど」

という声が聞こえてきた。

「工藤くん・・・」

「出るの遅かっただろ。ごめんごめん。今、鬼丸クエストのボ
スと戦ってて手が離せなかつたんだ」

「そんなこと誰も聞いてないわよ」

「あ、わりい。で、何か用でもあったのか？」

「ええ。昨日、博士から旅行のチケットを買ったのよ。1週間後なんだけど博士はその日

来れないらしいの。博士が誰かを誘えって言うからあなたを誘おうと思っただけど……」

「その旅行っていつだ？」

「え〜っと……1週間後だったはずよ」

「じゃあ俺行くよ!!」

「そう。日程は……朝5時に××空港のところまで待ち合わせなんてどう?」

「そうだな。そうしよう。で、他に誰誘っただ？」

「まだ誰も誘ってないのよ。あなたが1番なの……」

「そうか。あいつらでも誘うか?」

「あいつらって子供たちのこと?」

「ああ。あいつらなら喜んで旅行に行くだろ」

「そうね。でも旅行人数は7人までなのよ。随分半端な数よね」

「7人か……俺、灰原、歩美、光彦、元太で5人だろ。あと2人余ってるわけだ」

「ええ・・・」

「じゃあ俺が誘っておくよー!!」

「誰を？」

「それは当日のお楽しみってことで」

「はいはい、分かったわよ。で、子供たちに連絡を入れるのはど
つちがする？」

「俺がしておくよ」

「そう。じゃあ私はこれで切るわね」

「じゃあな」

ツーツーツー・・・

(それにしてもあと2人って誰なのかしら・・・)

第3話 謎の2人

北海道旅行3日前

そろそろ旅行の準備をしなくてはいけないと思い始めた哀はバックに服や持ち物を詰めようとしているところだった。

トウルルルルルル・・・

突然哀の携帯電話が鳴った。

誰だろうと思いい携帯電話を手を取った哀は小さな小窓の画面を見た。そこには「吉田歩美」と書いてあった。

「もしもし。灰原ですけど」

「哀ちゃん!! お久しぶりだねっ!!」

いきなり大声で歩美が言ったため哀の鼓膜は破れそうになった。

「ど、どうしたの？」

「さっきコナンさんから電話があったのよ!! 明々後日に旅行に行くのよね!!」

「え? さっき電話を貰ったの？」

「そうだよ!! それより、私たち探偵団を旅行に連れて行ってくれてありがとう」

「別にお礼を言われるようなことはしてないわ。 明々後日は楽しみね」

「うんっ!! あっ!! 携帯の電池が切れそうっ!! じゃあね、哀ちゃんっ!!」

「え、ええ」

ツーツーツー……

歩美からの電話が終わったあとすかさずコナンに電話をかける哀。

トゥルルルルル……

(ったく早く出なさいよ。 またゲームでもしてるのかしら)

「もしもし? 灰原?」

「ちょっと工藤くんどういっつもりよ」

「え? 何が?」

「何が? ってあなた今日旅行の電話をしたの?」

「あ、ああ…… すっかり忘れててよお」

「それで皆は行けるの?」

「ああ。 全員行けるってよ」

「あとの2人は行けるの？」

「もちろん行くってよ」

「そう」

「・・・あつ！！ ヤベツ！！ 電源が切れそうだ！！」

「あなた、吉田さんと同じなのね・・・」

「えっ！！ 何だって!?!」

「別に何でもないわよ。 それじゃあ、私そんなに暇じゃないから」

「おっ、おい!?!」

ツーツーツー・・・

コナンとの電話を切ったあと哀は旅行の準備をした。
準備の途中

「哀くん！！ 昼食はまだかのお」

という声が聞こえ哀は居間へ行き昼食の準備を始めた。

「哀くん、今日はサンドイッチが食べたいんじゃないか・・・」

「分かったわ」

博士の注文を了解した哀は早速パンを三角に切って卵などを使って

具を作り始めた。

「そういえばあの旅行はどうなったんじゃ？」

「ああ、それなら工藤くんや子供たちを誘って行くことになったわ」

「ほうほう。　しかし7人までだったはずじゃ。　誰か2人誘える
がお」

「工藤くんが誘っておくって言ってたわ」

「新一が？　誰を誘う気なんじゃ？」

「私も知らないのよ。　お楽しみとか言って教えてくれなかったし」

「2人と言えば・・・　蘭くんと毛利くんかのお」

「でもあの毛利小五郎が子供と一緒に旅行になんて行くかしら」

「それもそうじゃが・・・　じゃあ蘭くんと園子くんじゃないかの
？」

「それはありえるわね・・・」

「うん・・・」

哀と博士はあとの2人を真剣に考えていた。

第4話 出発

北海道旅行当日

朝5時に××空港で待ち合わせ。
最初に来たのはコナンだった。

「誰も来てねえのかよ・・・」

コナンは自分の手につけている時計を見た。

現在午前4時50分。

「ちょっと早かったかな」

コナンは近くの自動販売機の前まで行きコーヒーを買って
飲みながら待っていた。

すると・・・

「コナンくん!!!」

「コナン!!!」

「お待たせしましたー!!!」

歩美・元太・光彦がやって来た。

「よお！ 案外早かったじゃねえか」

「あれ？ 他の皆はまだ来てないの？」

「ああ。言いだしっぺの灰原すら来てねえぞ」

「朝早いですからねえ。 少くく遅れたって問題は……」

「でも飛行機に乗る時間って決まってるんじゃないの？」

「そ、そうでしたね……」

現在午前4時58分。

灰原が手に荷物を持ってやって来た。

「おいおい、時間まであと2分だぞ」

「仕方ないじゃない。 私夜行性なんだもの。 朝は辛いものよ」

「まったく昨日くらい早く寝」何か言った？」

コナンの言葉を遮って哀はコナンにジト目を向けた。

「な、何も言ってますん……」

「そう。 それよりあとの2人は？」

「ああ、その2人ならもうそろそろ来ると思っぜ」

「コナンくん、あとの2人って誰なんですか？」

「もしかして蘭さん？」

「いや、違うよ。 おっ！ 来たみたいだ」

その言葉に全員が向こうを振り向いた。

「よお！ 工藤！」

「はあ！？ 工藤！？ あんた誰のこと言ってるのん？」

「あっ…… 工藤やのーてコ、コ、ココ、ココ…… コナンくん？」

2人とは平次と和葉だった。

「この2人のことだったのね」

「ああ。 ま、良いだろ？」

「え、ええ……」

「おっ！ ちっこい姉ちゃんも一緒やないか！」

「ちよつとちよつと！ この子の名前は「ちっこい姉ちゃん」じゃないのよ！

ちやくんと「灰原哀」っていう可愛い名前があるんだからあー！」

歩美が平次に言ったことに元太と光彦も同意する。

「そうやで、平次。ちゃんと「哀ちゃん」って呼びー！」

「あ、あ、あああ、あい……哀……ちゃん……」

「うーん……平次が「哀ちゃん」って呼んだら何かロリコンのオッサンみたいやなあ。」

哀ちゃんむっちゃん可愛いしそういう変態に狙われそうやもん」

(可愛いのは顔だけだよ……)とコナンは思っていた。

「お、俺が変態のオッサンやお！？ 確かに顔は可愛いかもしれへんけどお、俺は

こんな元黒のそし……あっ……」

「お、おい服部……あんまりキツイこと言うんじゃねーぞ」

「す、すまん……」

「別に良いのよ。私もうごうごうのは慣れてるから」

この会話は他の皆には分からなかった。

「そ、そら良かったわあ！！ それよりはよお旅行に行った方がええんとちゃう？」

「そうですね。そろそろ時間も時間ですし」

「そうですね。じゃあ行きましょ」

哀が歩き出そうとしたが皆その場に立ち尽くしたままだった。
それを見た哀は不思議そうに振り返った。

「ねえねえ哀ちゃん……」

振り返った哀に言葉をかけたのは歩美だった。

「何？ 皆どうしたのよ？」

「あのを……どこに行くの？」

「北海道よ」

「「「「「「ほ、北海道！？！？！？！？！？！？！？」」「」「」「」

第5話 北海道

「おいおい、北海道って日本の1番北じゃねえか!!!」

「ええ」

「そんな遠くに行くなんて聞いてないぞ」

「だって言っていないもの」

（ははは・・・）

「ま、まあ僕たち東京人にとっては滅多に行けないところなんですしラ、ラッキーじゃないですか!!!」

「そうだよ、コナンくん!!! 私たち少年探偵団の絆が強まる絶好のチャンスよ!!!」

（北海道と探偵団の絆は関係ねえじゃねえか）

「それより早く行きましょ」

そう言って哀が歩き出した。
哀の後ろに皆がついていく。

「この便ね」

「やっぱり飛行機は最高だぜ」

元太が喜んで乗っていく。

ピンポンパンポン……………

出発のチャイムが鳴って皆シートベルトをした。

「平次っ！！ 北海道に行けるなんて最高やん！！ 哀ちゃんに感謝せなあかんわ！！」

「せやな」

「哀ちゃん！！ こんなバカ平次とあたしらを旅行に連れてってくれてありがとぉー！！」

「お礼を言うなら懸賞でこの旅行を当てた博士に……………」

「え、博士が当てたん！？ せやけど博士が見当たらないで？」

「今日は用事で来れないのよ。 だからチケットをくれたの」

「へえ」

数時間後

「……………着いたあ」

「夏なのに寒いわあ」

「アホ！！ 当たり前やんけ！！ ここは北海道やで！！」

「そんなん分かってるわ!!」

「おい!! 2人共、北海道に来てまで喧嘩すんなよな」

「そうですね。今日はもっと楽しみましょうよ!」

「ホラホラ、仲良く仲良く!」

(こんなガキに言われてやんの・・・アホくさ)とコナンは思っていた。

「それよりこれからどうするんですか?」

「まずはホテルに行って荷物を置いてくるわ」

「じゃあタクシーでも拾うか」

「そうですね」

空港の前にはたくさんのタクシーが並んでいた。
7人を3人と4人に分け別々のタクシーに乗ってホテルに行くことにした。

1号車 和葉・歩美・哀

2号車 平次・元太・光彦・コナン である。

* 1号車での会話 *

「ねえ和葉お姉さん!」

「なあに？ 歩美ちゃん？」

「和葉お姉さんは平次お兄さんが好きなの？」

「えっ！ いきなり……」

「吉田さん。 そういう質問はプライベート。 あまりしない方が
良いわよ」

「そ、そうやで！ あ、あたしは平次なんて好きやないねん！」

「ふん…… 私はコナンくんがだ〜い好き！！」

(そんなこと誰も聞いてないわよ)と哀は思っていた。

「歩美ちゃんはコナンくんのどこが好きなん？」

「かっこいいところ、優しいところ、頭が良いところ、頼りになる
ところ、助けてくれるところ……」

「かなり憎たらしいけどね」

「哀ちゃん…… コナンくんは憎たらしくないよっ……」

「そ、そお……？」

「うん……」

「バツ、バーロー！　そんなんじゃないよ」

そんなこんなでホテルに到着。

第6話 ホテル

ホテル

「結構大きいわね、このホテル」

「ああ。懸賞のわりには凄いな」

皆はホテルへ入って行きカウンターの前まで足を運んだ。
そして部屋の鍵をもらい部屋へ向かった。

「僕たちの部屋はどこなんですか？」

「大きい部屋に泊まりてえ！ おいコナン、俺たちは何号室なんだ？」

「えつと・・・ 803号室だな。 だけどあくまでこれは懸賞で当たった旅行だぜ？」

そんなに広い部屋には入れないと思うけど・・・」

「あつ！！ ここやで！！ 803号室！！！」

ガチャ・・・

「で、でかい・・・」

「案外高級ホテルなのね」

「うわっ！！ こんなに大きいホテル、初めて」

歩美が甲高い声をあげて喜んでいる。

「こんな大きいホテル、しかも北海道！ 平次、あたしむっちゃ幸せやねん！」

「そ、そうか」

「こんなに幸せなんやったら明日死んでもええな！」

「え……俺はまだまだ生きたいねん！」

「何言ってるん！ 平次、前（へそ）そして人魚はいなくなった（へそ）のとき（長生きしても

良いことない言ってたやん！！」

「せ、せやけど17で死ぬんは早すぎやんけ！」

「おい服部。 お前少しは仲良くしろよ」

「すまんすまん」

「それより今、何時ですか？」

「12時ちょっと前ね」

「ちょうど昼飯の時間か」

「じゃあ俺絶対うな重！……！」

「あたしは北海道のお寿司が食べたい！」

「和葉お姉さん、お寿司は夜に食べるものってお母さんが言ったよ？」

「へ、へえ…… そうやったんか……」

「私はパス」

「お、おい、灰原」

「お腹すいてないもの。飛行機の中でお弁当食べたし。行くんだったら皆で行ってきて」

「でも…… 僕もあまりお腹すいてないですね」

「じゃあ俺もパス」

「え〜 コナンくん行かないの〜？」

「う、うん。夕食までお菓子とかちよこちよこ食べてれば何とかなるし」

「そつかあ〜 でもあたし食べたいし…… 誰か一緒に食べに行かへん？」

「俺、うな重じゃなくても良いから食べに行く！」

「俺も何か食べたいし仕方ないから和葉に付き合ったるわ」

「仕方ないって何やねん！　けど男ばかりやん！　歩美ちゃんも一緒に行かへん？」

「うん！」

「決まりね。　私たちは部屋で待ってるから」

「うん！　分かった！」

こうして和葉・元太・平次・歩美はご飯を食べに行った。

第7話 別行動

* 和葉・元太・平次・歩美 *

この4人はホテルの食堂へ向かっていた。

「何食べようかなあ〜」

元太が凄い顔をして考えている。

「ちよつと元太くん！ 凄い顔してるよ！」

「ハハハハハ」

「あたしは何食べようかな〜」

「そんなん食堂に行ってから決めたらええやんけ！」

「せやけど・・・」

こうして4人は食堂へ行った。

・・・バイキングだった。

「何や、バイキングやったら食べるの決めなくても良かったやん！」

「うな重うな重！！」

* 哀・コナン・光彦 *

この3人は色々なことについて話していた。

「あ、あの・・・ 灰原さんっ!」

最初に声を発したのは光彦だった。

「何?」

「灰原さんって・・・ 好きな人居ますか?」

「は?」

「学校では灰原さんって男子にモテモテですし・・・ その・・・
好きな人が居るのかなあって思ってたんですけど」

(最近そのテの話題が多いな)とコナンは思っていた。

「私って・・・ モテてるの?」

「は、灰原さんっ!?!? 自覚ないんですか!?!?」

「え、ええ・・・」

「コナンくんは灰原さんがモテているってこと知ってますよね!?!?」

「ああ」

「ほんとに知ってたの!?!? 江戸川くん、そういうことについて鈍

いから・・・」

「他人の恋には結構鋭いんだぜ！俺はこの2週間の間に6人もの男子から

相談を受けたんだ」

「相談って・・・どんな相談ですか？」

「灰原さんと付き合うためにはどうすればいいかっていう相談」

「ええ！？」

「ってことは・・・このクラスには灰原さんのことが好きな人が6人も居るんですか！？」

「ああ、そうだな」

（お前を入れれば7人だろ）とコナンは思っていた。

「へえ・・・私がそんなにモテていたなんて初耳だわ」

「それでコナンくんは何て答えてたんですか？」

「あ、ああ、それはだな・・・おめえの手にはおえねえからやめとけて」

「悪かったわね。手におえないような人で」

「い、いやあ・・・ハハハ」

こんな話をしていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8154a/>

夏休み旅行

2010年10月11日05時13分発行